

## Dhādeki-Sālhāpūr —北インド農村の社会と生活(1)—

佐々木 明

‘Dhādeki-Sālhāpūr’の表題で北インドの伝統的農村の社会と生活の記述を何回かに分けて行なう予定である。北インド中央部 Upper Doāb (Gangā-Jamnā 河間上流地域)で、1974年1月から翌年4月中旬まで筆者自身が断続的に行なった実地調査が記述の基礎である。ただし一連の記述の目的は単なる調査の報告ではない。既存研究をも総合しつつ、北インド<sup>(1)</sup>の伝統的農村社会の全体像を把握・理解することが目的である。‘Dhādeki-Sālhāpūr’の記述は、伝統的北インド農村と宗教としての Hinduism とが特に関連しないとする観点(佐々木、1980; p.100)に立っている。インド社会研究の論述の一般的方式と多少異なる点がこの記述にみられるのが、この立場によるものであることを、最初に言及しておかなければならない。

Dhādeki-Sālhāpūr は調査対象村の仮称である<sup>(2)</sup>。厳密に言えば mauza (Arabia 語: Mughal の知行単位、原意: 財産)に与えられた名称である。Dhādeki と Sālhāpūr は隣接する二つの mauza で、Dhādeki はこの村の dominant caste の共通始祖である Dhādā の村、の意である。-kī は所属をあらわす後置詞(の女性形)で、あとにつづく locative 名詞は Punjabi 風に (Eglar, 1960; p.80) 省略されている。Sālhāpūr は人の住んでいない「空の mauza」で、Dhādeki に隣接する小地域である。<sup>(3)</sup> 税制上の地表面区分である Dhādeki-Sālhāpūr は、したがって社会的には単一である。この村は他の mauza とともに Mangalaur の町を中心とする Mangalaur Pargana (郡:<sup>(4)</sup>)を構成し、この Pargana は他の Pargana とともに Saharanpūr の町を中心とする Saharanpūr Jilā (県)を、この Jilā は他の Jilā とともに Delhi を中心とする Delhi Subah (道)を構成するというのが Mughal の行政区分である。英領期以降変遷があり、現在では Pargana に相当する Narsen Development Block, Roorkee の町を中心とする Roorkee Tahasil (徴税区: Jilā を4~5に分割したもの)、Saharanpur Jilā, Uttar Pradesh (州)が小さい順であげた場合の行政単位である。

Dhādeki は単独調査者が網羅的に調査するには明らかに大きい。また入村の事情から formal な調査が困難だった。やや古い統計的資料がえられているので、これに基づいて概要を述べることができる。1961年の国勢調査によれば総面積456ha、総人口1,534人、総世帯数287、人口密度336/km<sup>2</sup>、一世帯あたり面積1.59ha<sup>(5)</sup>、一世帯あたり人口5.3である。無住の Sālhāpūr も Dhādeki の住人の占有にかかるから、その面積95haを加えると一世帯あたり面積は1.92ha、人口密度は279/km<sup>2</sup>である。男性人口847、女性人口687で性比は811と男性過剰である。このうち Harijan (被差別人口)は467人で全人口の30%をしめる。Harijan の性比は上記よりは正常値に近く868で、非差別人口の性比787に比して著しく高い。上記数値に比して調査当時には総人口・人口密度・世帯数・性比が上昇し、一世帯あたり面積が減少していたことは明白である。また一世帯あたり人口は無視しうる程度ではあるが上昇し、Harijan 人口比が多少減少したことを北インドの全体的傾向から推測しうる。

就業人口は男性 500人、女性25人である。このうち大小零細にかかわらず農地を占有する村落居住者を意味する「自作農」が204人(うち女性5名)、農業労働者が男性のみ105名である。農業労働が主な収入ではないとする就業者は“household industry”59名(女性1名)、建設労働者22名、商業3名(女性1名)である。この他に「その他132名」(うち女性18)があるが、“household industry”・建設労働を含む各種の雇用を得るが、いづれをも主業としがたく、実質的には農業労働者とみられる。したがって全就業人口525(うち女性25)のうち、441名(84%)が農業を主業としていることになる。“household industry”・建設労働の就業者の大部分は附近の町で主要な収入を得るが、農繁期には一時的に農業労働に組み込まれるから、一年を通じて農業に全く従事しない就業人口はどんなに大きくみつもっても10%を越えないことが明らかである。

非就業人口は1,009人にのぼる。このうち男性が347、女性が662である。男性は子供・老人及び少数の学生であり、女性は全年齢層にわたる。非就業人口は統計で全人口の3分の2に達するが、その多くは一時的に農業労働を行なっている。農作業を行なわないことを強調する dominant caste の成人女性は農繁期に家畜の世話をする。農業労働者世帯では少数の老人・幼児を除けば、年齢・性別をとわず賃金労働の機会を逃さないようにしていないと生活が極めて困難になる。こうした労働力を吸収する最も大きなものは農業経営であるから、非就業人口が一時的に就業する場合はほとんどが農業的である。つまり国勢調査の就業統計は農業労働者数を過少評価している。国勢調査上の「農業労働者」は現実の農業労働者のうちの特定部分を意味するものとみた方が妥当である<sup>(6)</sup>。このように Dhādeki はある程度郊外村的な性格をもちながらも全体として農業的といえる北インド村落共通の経済構造を有している。

### (1) 村の環境

Dhādeki の生活を理解する背景として、気候等の環境に関する知識が不可欠である。インドの他の村と同様に Dhādeki の長期的気象統計はないが、この地域の等温線、等降水量線がおおむね西北西↔東南東方向に走っているので Dhādeki の西北西にあたる県庁所在地の Saharanpūr の気象統計を Dhādeki のそれに同定できる。この統計によれば Dhādeki は北インドの他地域に比してやや多雨であり、ほんの少し冷涼である (State Government of Uttar Pradesh, 1961; p. 150)。この統計を Hindū 暦・農業暦と組み合わせて、次の6つに区分すると生活を理解しやすい。

Baisakh 月(4月10日～5月20日頃)：降水は極少(積算20mm以下、雨の日2日以下)で、最高気温は一定して体温以上になる。冬作(rabi)は既に収穫され、夏作(kharif)は未播種で農閑期である。畑にあるのは植えつけ直後及び一年たって成長した甘蔗のみである。

Jēth-Asārḥ 月(5月20日～7月10日頃)前月と同様の非常に暑い晴れた日に、とおり雨のふるやや涼しい日が混じる。雨は強風を伴ない、Jēth 月では降雨がみられず表面が乾燥しているので砂嵐(āndhi)がおきやすい。Baisakh 月には干上った溜池に少しづつ水がたまりはじめる。この期の降雨を利用して、米・雑穀・豆類を主要作物とする夏作(kharif)の播種がこの期の末に行なわれる。

Sawan-Bhadon 月(7月10日～9月20日頃)“Barsatt”と呼ばれる最多雨期で、年間降雨

量の約8割がこの期に集中する。最高気温は降下して体温以下になる。雨は強くしかも長時間降る。この期の後半には晴れた日が多少多くなり、最高気温が体温前後に再上昇する期間 (“second summer”) があり、kharif の結実を助ける。kharif 収穫前の農閑期であり、伝染病の多い不健康な時期である。Baisakh 月から Bhadon 月までの約5ヶ月間は最低気温が 20°C をわらない熱帯的気候の時期 (garmi : Persian) である。

Kuar-Kartik 月 (9月20日~11月10日頃) 降水量・気温とも急減する。特徴的なのは積算降水量がそれほど下がらないのに比し、雨の日一日あたりの降水量が極少になることである。この期は農繁期で、前半には夏作 (kharif) の収穫が行なわれ、後半には冬作 (rabi) の播種が行なわれる。弱い雨の間をぬって kharif 収穫物の日光乾燥を行ない、次第に乾燥して適当な土中湿度が得られる時点で rabi 播種を行なう。

Aghan-Pus 月 (11月10日~1月20日頃) 気温は下がりつづけ、12月末から1月始めにかけて最低になる。雨の日一日あたりの降水量が前期に比してやや上昇し降水総量も多少上昇する。雨量は干上っていく溜池の水位を再上昇させる程ではないが、Barsatt の雨とは異なり一日中ふって耕地を適当に湿らせ、冬作物の発育を助ける。伝統的農法では農閑期にあたるが、現在では主力商品作物である甘蔗の収穫・搾汁・粗糖生産が盛んに行なわれる。

Magh-Phagun-Chait 月 (1月20日~4月10日頃) 降水量は再び減少する。気温が急に上昇し大気の状態が不安定になり、前線の通過にともなって雹・突風が現われ、収穫直前の rabi 作物が被害をうけることがある。農繁期にあたり、前半には粗糖生産が、後半には rabi 収穫が行なわれる。甘蔗の植え付けがこの期の終りに行なわれる。伝染病の最も少ない時期である。Kuar 月から Magh 月までの5ヶ月間は最低気温が 20°C を割る温帯性気候の続く季節である。気温のレベルはやや高いが、温帯の秋・冬・春に相当する気候推移をみる。

気候によって住民の健康は大きな影響をうける。Amoeba 赤痢・influenza・malaria が Dhādekī の三大伝染病で、罹患率は幼児で最も高い。これらの流行は体力を消耗する Baisakh の酷熱期から増加し、農業暦上の農閑期である Barsatt 期に最も多い。全体的な Dhādekī 伝染病暦は Banaras 周辺のそれ (Hopper, 1955 : p. 149) と類似し、伝染病による労働力損失の季節性も似ている。Amoeba 赤痢は雨期の7, 8月に非常な流行をみる。地表面は赤痢 amoeba に汚染しつくされており、雨期初期の豪雨により汚染表土が飲料用井戸に流入するから、雨期開始後約一週間目から熾烈な流行をひきおこす。免疫性がないので新生児も罹患し、致命的になることがある。雨期後半には細菌性消化器伝染病がふえ、一年中で最も不健康な状態になる。

Malaria は定期的流行をみる。地表滞水が太陽に直射される8~10月が最流行期で、一世帯に必ず一人の患者が出る程である。現在では解熱が容易にできるので、余り深刻な病気とは考えられていない。北インド一般にこの病気が減少したことが報告されている (Nath, V., 1965 ; p. 48) が、この村での観察とは矛盾する。Influenza 様の virus 性伝染病は、日較差の小くなる雨期にやや少ない他では、ほぼ2ヶ月に一回のペースで異なる流行をみる。典型的 influenza は冬に多く、栄養状態の悪いこともあって肺炎を併発しやすい。雨期には経口性の virus 伝染病が多い。伝染力の弱い伝染病で目につくのは結核である。老人性のものが目立ち、中・下層では老人の1/4~1/3が罹患しているのではないかと疑われる。癩病患者

は少なくないのだろうが、家族内に隔離されるためか、観察者の目に触れない。男性では水煙管による喫煙が盛んで、老人男性には氣道・胃の慢性疾患が少なくない。主要蛋白供給源は牛乳と豆であるが、十分に牛乳を飲めるのは上層のみで、下層では豆類の摂取量も多くない。この結果下層民の体格は全体にやや貧弱で平均寿命も短かく、乳幼児死亡率も高いものとみられ、生き残った幼児に成長障害がみられることが少なくない。これでも独立後には相当に改善されており、乳幼児死亡率を高くしていた天然痘は1960年代から流行をみていない。

自然環境は一面の耕地化による人工化が顕著である。主要土壌は北インド平野の他の部分と同じく、大部分をしめる loam (khākī: Persian) と部分的にみられる粘土 (dakkar: Hindi) である。khākī はカーキ色の語源となった黄褐色植土で、水をふくむと粘着力と流動性をまし雨期には滞水にとけて交通を妨害し、乾燥すると粉状になり風に舞い上って砂嵐をおこす。表土は極めて厚い。このことは他方で建築用等の石材入手が極めて困難な事を意味する。かつてはこの地方を一面に覆っていたと思われる森林は19C中頃迄に皆伐されたとみられる。村落周辺の本木植生は Sal (材木用), Nim (レモン), Ām (マンゴー) 等の有用樹木からなる人工林である。宅地 (abādī: 注7) 内にみられる樹木は、宅地が拡大される過程で abādī 内にとり残されたもので、庭園をつくる習慣はない。主たる水面である溜池にはひしがつくられる。魚はいないとみてよい。一年中水のある池が少ないから、かめ等の水生は虫類も少ない。とかげはやや多くみかける。鳥ではインコが冬以外の全期間目につく。カラスは家庭生活に密着している (Eglar, 1960; p. 25)。孔雀の鳴き声はよく耳にするが、用心深く姿を見かけることは少ない。哺乳動物ではマンガースをみかける程度である。森林被覆の広がった時代には、燃料・食料 (特に蛋白源) を森林・池に依存する傾向が下層民では強かったとみられるが、現在までに生物相は二次化・劣悪化して、採集経済により下層民の生活状態を維持する基盤はない。

## (2) 村の景観

北インドの他の農村と同じく、地平線までつづく黄褐色の農地の拡がり背景として、点々とかたまる林の中に、Dhādekī-Sālhāpūr はある。村に入る時にまず目につくのは、村の周囲をかこむ複数の溜池と低くつづく家並みである。日乾煉瓦の家をたてるための煉瓦原料土を掘り、その掘り跡に水がたまっただのが溜池 (kund) であるから、溜池には農業的用途はない。溜池の端をしきって稲をつくったり、人力を用いて水をくみあげ隣接する野菜畑に小規模な灌漑を施すことも行なわれたが、近代の大規模 (?) 灌漑の可能な現在では農業的用途は水牛の水浴程度である。水質のよい池からは壁・床・天井用の粘土 (ghol) をとり、日乾煉瓦家屋の保守に用いる。成文法上溜池は村会 (grām samāj) に属し、恣意的粘土採取ができないことになっているが、実際には自由に採掘している。水質がよく、かつ面積の広い池では singhara (ひし) kamal (蓮) kakrī (うり) を栽培する。この利益権は caste に関係していて、村会の介入する所でない。「水質の良い」ということはその溜池の周辺で排便しないことを意味する。排便後局部を水洗するのが習慣だが、乾期には洗うべき水が溜池以外にはなくなるので、abādī に近い溜池の周辺が衛生的用途に用いられる。Rajasthān では溜池の水を飲用にする例も報告されている (Bose & Jodha, 1967; p. 276) が、Dhādekī

ではこの用途はない。村の人口がふえ、宅地が拡大することにより、*abadi* 周辺の溜池は埋め立てられて小さくなっていく。

溜池は居住地を区分するという社会的機能をもっている。Dhādekī の *abadi* の周辺には東西南北の各方位にそれぞれ一つづつの溜池がある。このうち西側と北側の溜池は *abadi* の外側をかたちづくり、東側と南側の溜池が被差別人口と差別されない人々の居住区を区分している。*abadi* の南東部には溜池をへだてて、全人口の約1/3をしめる被差別人口 (Chamār と Bhangī の 2 caste よりなる) が居住する。*abadi* 中央部には同じく全人口の約 1/3をしめる dominant caste である Jāt が居住する。被差別人口でも Jāt でもない身分——つまり中間 caste の家屋は Jāt の家屋群の周辺に位置する。Jāt の住居拡大は他の caste よりも早く、現在では中間 caste の家屋群の外側にドーナツ状の拡大をみせている。Brahmin は Mnsalmān (イスラム教徒) とともに *abadi* の西北側、つまり被差別人口の反対側に居住する。Dhādekī の場合には Brahmin と被差別人口の位置関係が宗教的方位思想とたまたま一致するが、被差別人口が差別されない諸 caste の北東側に住む例も報告されており (Gangrade, 1975 ; p. 261), 居住地の方位関係が宗教的思想等によって規定されるとはいえない。Brahmin も Mnsalmān もともに中間 caste の一つと考えられていて、方位思想に関係する特殊な意味をもたない。

溜池が被差別 caste を隔離するのと同じ様に井戸とその使用は身分的關係を反映している。Dhādekī の *abadi* 内には井戸 (kuū) が 8 つある。井戸の地上部分は一辺 120~240cm の不整多角形台をなす焼成レンガ積みが 50~100cm 設けられ、家畜等が落ちないようにしてある。水位は 5 m 位である。8 つのうち Jāt がつかっていた 5 つは現在では使用されない。差別されない人口が用いている井戸は 1 つだけで、Brahmin と Musalmān が用いている。Musalmān が上水源として水を汲むことが多く、時にはそのまわりで水浴する。残りの 2 つは被差別人口の主要水源である。井戸の使用については、被差別人口と差別されない人口の区別は厳格であるが、Musalmān・Hindū、または caste 別の使用制限はなく、水汲みにならんだ時に下の身分の者が上の身分に番をゆずる程度である。井戸の差別的な使用原則を破った場合の罰則を明らかにすることはできなかった。昔は皮袋を用いたが、現在ではブリキバケツを投げ込む。

Jāt は現在では井戸水を全く飲まない。人畜ともに飲用水を手押ポンプにたより、浴用水もまかなう。井戸と同じく衛生的な排水路がつくられないので、排水はポンプの周囲に滞溜し、この水たまりに水を浴びにつれて来られた家畜の排泄物・炊事・水浴等の排水がたまり、ポンプの接地部が密封されていないので、汚水のいく分かは地下水にまじっていくから、ポンプを使用しても衛生的に完全とはいえない面がある。ただし大きく口のひらいた井戸よりは少なくとも安全である。水源の種類にかかわらず、家庭汚水は家から道に流れ出し、雨期には雨水と汚水のまじりあった水が道に拡がる。この状況を近代的な手押ポンプの普及はむしろ悪化させている。台所から離れた井戸から水をくんでくる作業は水の総使用量を抑制した。つまり手押ポンプの普及により増加した下水は *abadi* 周辺の溜池に流入し貯水量を増加させ、貯水期を延長させる (Nath, V., 1965 ; p. 814) から、不衛生な汚水が村の近くに長期間たまることになる。Malaria 蚊にとって、特に熱い時期に水面が消えないことは良好な繁殖条件となって、malaria の流行を多少助けることになる。

北インドの現代農村では伝統的な日乾燥瓦家屋と近代的な焼成煉瓦家屋とが混在し、Dhādeki も同様の景観をもつ。この二つの家屋素材のまじり方は一様ではなく、被差別人口の居住区はほとんど日乾燥瓦家屋からなり、差別されない諸 caste の居住区、特に dominant caste である Jāt の居住区には焼成煉瓦家屋が多い。また差別されない諸 caste の居住区が樹木にかこまれているのに比し、被差別 caste は既にある樹木を少しづつ燃料として用い、しかも新たに植える余裕をもたないので、その居住区には樹木が稀にしかみえない。この結果、abadī 内部は、樹木の少ない、日乾燥瓦によってつくられた平屋からなる被差別人口の居住区と、樹木の多い、焼成煉瓦によってつくられた複階家屋のまざる差別されない人々の住む区域に、景観的に分離される。この二つ景観は北インド農村社会の基本的関係を象徴している。被差別人口と差別されない諸 caste の各々で圧倒的多数をしめるのは、Dhādeki では Chamār と Jāt であり、2つの caste の合計は全戸の2/3以上に及ぶ。前者は農業労働者であり、dominant caste、つまり地主自作農である後者に雇入される。Jāt 等の dominant caste が農業労働者を雇入するのは、一般的に dominant caste に手作忌避傾向があるためとされる。北インドではこの傾向を宗教的・儀礼的に説明しない。Brahmin が dominant caste である村では、Brahmin が生命を傷つけることを忌避することが手作忌避の理由であるとされるが、この説明は北インドでは近代的であり、Brahmin の手作忌避を他の dominant caste の手作忌避から区別することはできても、dominant caste 一般の手作忌避の説明にならない。

特に理由をもうけず、dominant caste が手作を身分的に忌避し、農業労働の大半を雇入する農業労働者に行なわせる、というのが北インド農業経営の基本である。しかも雇用労働の需要が年間を通じて一定に保たれているわけではない。すでに述べたように、農繁期と農閑期があり、農繁期には常備の被差別農業労働者 (Chamār) の労働力では全く不足する一方、農閑期にはこの常備の労働者すら遊休状態になる。労働力が村内で決定的に不足する最繁期には、地域全体に労働力不足が生じるので、他の農村から Chamār を「引き抜く」ことは不可能である。こうした場合には中間 caste を農業労働に投入する。つまり戸数の約1/3の農業経営者 (Jāt) が、約1/3の常備農業労働者 (Chamār) を雇入し、これのみでは農業労働力の不足する最繁期に最後の約1/3の中間層にまで雇用範囲をひろげる。

この図式は単純明解であるが故に、北インド農村にみられる複雑な社会関係を説明するには不完全である。Jāt その他の dominant caste は農作業のかなりの部分を自ら行ない、必ずしも厳密に手作忌避を行なうわけではない。Chamār は常備農業労働者となる以外に、村外雇用に従うことがある。また中間諸 caste のなかには最繁期でも農業労働に参加しないものがある。農業的雇用による caste 関係の図式は、各 caste がそれぞれの世襲的職業を「もっている」とする一般的な考えとも明らかに矛盾する。Dhādeki でも中間諸 caste のかなりの部分が伝統的 caste 職業についていて、それらの世帯は全世帯の約20%に達する。この caste 職業と農業労働の関係のとりあつかいには慎重を要する必要がある、caste 職業に関連する物質文化について十分な情報を提示しないかぎり、合理的な説明が理解される蓋然性は小さい。それゆえ、何回かに分けて行なう Dhādeki-Sālhāpūr の社会と生活の記述では、caste 職業とそれに関連する社会関係について予断を与えやすい caste の記述を羅列的行なうことをさげ、農業経営者・地主自作農としての支配性の明白な Jāt の記述をまず行なうこととする。

## (3) Jāt の農村支配

北インドの dominant caste のうち最も多いのが Jāt である。経済的な観点からは農業労働者を雇入する農業経営者であるが、この経営権が生得的に限定され、系譜的な様相をしめす結果、dominant caste が観察される。dominant caste の支配性はそれゆえ単に経済的ではなく、政治的でもある。Dhādeki の場合、1953年の Pradhan (村長) 職制施行後、最初の一期4年間を除き Pradhan はすべて Jāt に独占されている。また独立以降の Panchayat の member は、Chamār に指定されている成文法上の 'scheduled post' および唯一の例外を除きすべて Jāt によっている。最初の一期4年間 Pradhan を勤め、現在でも Panchayat に議席のあるのは20Cに入村した Brahmin で、村政と特殊な関係にあるので、例外を認められている。

Jāt が政治・経済の実権を集団的に握っている村落を Jāt 村落とよぶ。現代の Jāt は都市にも進出し、学校教師・工場労働者になっている子弟も少なくないが、農村居住者はすべてが「地主自作農」である。ただし農村内副業は多様で、下層では牛乳販売・小商店経営、上層では焼成煉瓦工場、バス所有者などが多い (Sharma, H. P., 1971; p. 163-165)。Jāt の農業経営の中心は小麦を主体とする主穀栽培であり、19C中葉以前に非主穀農業の中心だった abadi 周辺の園芸的耕作を行なわなかった。Jāt は Rājput より直接的農業労働を頻繁に行なうとされる (Sharma, K. L., 1970; p. 262) が、両者の相違がそれほど明瞭でないことは19C以来指摘されているとおりである。Jāt が農業労働者を雇入、使役して行なう主穀栽培から部分的に非主穀農業を行なうようになったのは甘蔗栽培の普及以降である (Pradhan, 1966; p. 13)。

Jāt の伝統的社会習慣は近現代 Hinduism の観念とは大きく異なっていた。一夫多妻・寡婦再婚・caste 間婚 (特に低 caste の女性の「購入婚」)・levirate 婚・兄の妻と弟との間の性関係黙認などが独立後まで残存していた (Pradhan, 1966; p. 3)。その宗教的生活にも古代インドとの関連を発見しがたく (ibid; p. 216)。親族集団にも宗教的機能がない (ibid; p. 14 2) など、近現代 Hinduism に関係する特徴を指摘することは極めて困難である。こうした非 Hindū 的習慣は独立後の近代的国民教育等により急速に過去のものとなりつつある。しかし伝統的北インド農村がこうした dominant caste と Chamār その他の Hinduism と特に関係しない習慣・生活を送ってきた人口とによって構成されてきたことは、Hinduism によって北インド農村を分析することの意義を疑わせしめる。

実際 Jāt には Hindū・Muslim・Sikh 等の諸「宗教」に属する人々がいる。こうした各種の Jāt を加えると、その比率は現 Haryana 州西南部 (Hissar 県: 主として Muslim)、及びこれに北接するインド領 Punjab 州中西部 (Bhaṭinda, Ludhiana 両県、主として Sikh) で最も高く、Ambala を中心とした半径100kmと200kmの同心円にはさまれたドーナツ型地帯の西南半に分布の核を有する。この地域は Lahore から Agra にいたる中世北インドの中心地帯の中央にあたり、Jāt と中世北インド政体との何等かの関係を暗示している。構成比はやや下がるが、中世北インドの中心地帯全体で Jāt 村落は極めて多く、次第に減少しながら、少数ではあるが Sind (現 Pakistān 領)・Rajasthan, Kashmir 州にまで広がっている (ibid; p. 1)。

Jāṭ は「Jāṭ 族」などと訳されるが、系譜的・政治的一体性を意識する「部族」ではない。現存する系譜等に共通始祖は記述されず、そのような伝承はない。Sanskṛt の 'to blend together' という Jāṭ の語源 (Dwivedi, 1970 ; p. 392) に明らかなように、系譜的には「寄せ集め」の caste である。Delhi Sultanate 以降に現 Pākistān 領 Punjab 方面から「さみだれ式」に東に入殖した結果現在の分布を示すようになったもので、共通始祖をもつ Jāṭ の外婚集団 (got) は地理的に飛び飛びに分布する傾向が強い。入殖することによって成立する占有権の及ぶ範囲は村落密度が上がるにつれて小さくなるから、古い時点に設定された占有権が広範囲に及べば got 自体が一円支配的な構造 (Sharma, S. P., 1973 ; p. 84) をもつことがあり、逆に新しい Jāṭ 村落では1つの mauza 内に複数の got が存在する場合もある。同一 got が地理的に離れた村落の dominant caste によって構成される場合、外婚規制は守られるが、親族組織を形成するわけではない。got 間には特定の身分的序列 (hypergamy を形成させる順位) がなく、任意の got 間を結ぶ組織に関する観念が存在しない。

Jāṭ の村落間関係・組織の欠如に比して、村落内での Jāṭ の caste 支配は強力かつ実体的 (Gangrade, 1975 ; p. 253) であり、古代インドと関連する varṇa 階梯は伝統的支配の基盤ではない。その農村支配の慣習法的基盤は、農地の家産的占有 (Baden-Powell, 1972 ; p. 420) にある。発生的には一世帯の家産的占有だったが、同一家系の世帯数増加により、生得的占有者群による身分的な集団占有へと変化している。こうした集団占有は宅地 (abadī) にも及び、占有継続は当該集団以外への土地売買・移譲禁止の慣習法による (Pradhan, 1966 ; p. 25)。19C 中葉以降の人口激増 (Etienne, 1968 ; p. 52) の結果、部分的に自作農経営を維持できない小規模占有 Jāṭ 世帯が生じているが、村外雇用により生活しこの占有権を Jāṭ のなかに留めるから、集団占有は維持される。Hinduism の varṇa 階梯では頂点にある Brahmin は Jāṭ 村落では小規模の耕作権を Jāṭ による寄進を通じて認められるだけで (Gupta, T. R., 1961 ; p. 598), Jāṭ の支配性が varṇa の階梯より強力なことは明白である。Jāṭ と Brahmin との間の非共卓性を近代 Hinduism は Brahmin の varṇa の高さに帰するが、北インドの Jāṭ 村落では Brahmin が非占有者身分である中間 caste に属するからである (Marriott, 1968 ; p. 154)。Brahmin 以外の caste が Jāṭ から借りる耕作権は Brahmin よりも弱く、名目的耕作権譲渡に及ぶことすら例外的である。

Jāṭ の農村支配によって象徴的な従属的位置に立たされるのが被差別農業労働者の Chamār である。各種の人格的差別と無権利状態下で、Jāṭ が「耕作」する土地で Jāṭ の監督下に農業労働に従う Chamār が、何等かの抵抗を必要とする場合、逃散以外には手段がなかった。現代では姻族居住村に逃げ込むことが多い (Beidelman, 1959 ; p. 45) が、近距離に広汎な不耕地があった前近代では、未開墾地に逃げ込んだとみるのが自然である。Saharanpūr 県は Uttar Pradesh 州西部の逃散 Chamār の受け入れ地域であった。地下水位の低い Uttar Pradesh 州中心部に比べると、Saharanpur では飲料水が得やすく、井戸堀りの資本のない Chamār の集団生活が容易である。こうした条件を反映して、Saharanpūr 県を含む Uttar Pradesh 州西部では Meerut 県を中心にして北にむかって人口密度・村落間距離・一村あたり人口が減少すると対照的に被差別 caste の対人口比が増大する (Mukherji, A. B., 1974 ; p. 25, 28)。こうした逃散労働者人口を「追いかけて」Jāṭ 村落が東進するのが、中近世北インド農村拡大の mechanism の一つであろう。



北インド農村の基本的な caste 構成である Jāt・Chamār 複合が確立するのは Mughal 期の前期 (16・17C) とみられ、Hindū 農村には不可欠であると現在では考えられている Brahmin は基本的 caste 構成と Jāt 占有権の確立後、ある程度の期間を過ぎてから、Jāt による土地寄進をうけて加わったものが多いとみられる。占有権確立期は Mughal 支配の確立期でもあり、また地理的にも Jāt 農村の密集地帯と Mughal 支配の中心部とが一致するから、Jāt の農村支配の家産的占有原理が、中世北インドの Islam 政体が与えた許可に基づいており、この農村支配が逆に中世北インドの Islam 政体を支持したことを指摘できる。それゆえ、Jāt の支配原理を復古主義的な論理 (菜食、寡婦不再婚、低 caste 忌避等) に求めようとする (Freed, S., 1970; p.8) のは明らかに不合理であろう。Jāt よりやや遅れて北インドに拡散した Rājput と同じように、中世政体によって占有権を認められた雑多な出目をもつ手作地主身分が Jāt であり、この権利に基づいて現在まで農村の実体的支配をつづけている、とみるのが最も妥当である。こうした歴史的性格の理解は、北インド農村一般の社会と生活を把握する上で不可欠であり、今後の分析の前提となる。

— 註 —

- (1) 北インドとここでよぶのは、インドの Uttar Pradesh 州平野部、Haryana・Punjab 州、Pakistan の Punjab 州、及びこれら諸州に東・西・南接する若干の地帯である。
- (2) 正確な名称のうち語尾の -ki, -pūr のみを保存し、これらの語尾に先行する部分をいれかえた。Dhāde-, Sālhā- をえらんだのは、この地方ではこれらの語が、最も頻繁に上記の各々の語尾に先行することを確認したからである。調査対象村の仮称は恣意的な方法によるかのようであるが、村名がその歴史と歴史に影響される社会と特定の関係をもつという立場から、語尾のみを保存するように仮称を選択した。
- (3) Sālhāpūr にかけて独立した村落があり、近世中に放棄されたという伝承は全くない。Sālhāpūr の本来の名称が「狭い村」を意味し、Dhādeki と Sālhāpūr の面積比が整数に極めて近いことは、近世中のいつれの時点で知行分割の必要から二つの mauza が設定されたことを暗示する。
- (4) Pargana、及び後出の Jilā, Subah, Tahasil 等の行政区分用語を固有名詞と伴に用いる場合には、固有名詞を後置するのが正しいが、ここでは便宜的に固有名詞を前置した。
- (5) この数値のみが国勢調査では算出されないが、農業経営との関連で重要なので挿入した。
- (6) 調査統計上の「農業労働者」はおそらく常傭の農業労働者を意味する。充分な経営規模をもつ「自作農」は一名の農業労働者を長期雇用するのが北インド農村では一般的とされる。Dhādeki の統計上の「農業労働者」数と本格的「自作農」数がほぼ一致することから、上記のように推測して大きな誤りはないだろう。
- (7) abadi は除地 (永久免税地) を意味する Mughal 期の用語で、集落に対応する全宅地が除地であったことから、集落を意味するようになった。

参 考 文 献

- Ahmad, Sanghir 1970 "Social Stratification in a Punjab Village" *Contributions to Indian Sociology* Vol.4 pp105-125
- Baden-Powell, B.H. 1972 (originally in 1896) *The Indian Village Community* Cosmo Publications, Delhi
- Beidelman, Thomas O. 1959 *A Comparative Analysis of the Jajmani System* Association for Asian Studies, New York
- Bose, A.B. and N. S. Jodha 1967 "Some Observations on Factors Influencing Settlement of Households" *Man in India* Vol. 47 pp271-278
- Cohn, Bernard S. 1960 "The Pasis of an Indian Village" *Comparative Studies in Society and History* Vol. 3 pp241-249
- Dwivedi, Girish Chandra 1970 "The Origin of the Jats" *Journal of Indian History* Vol.48 pp377-393
- Eglar, Zeklye 1960 *A Punjabi Village in Pakistan* Columbia University Press, New York
- Freed, Stanley 1970 "Caste Ranking and the Exchange of Food and Water in a North Indian Villae" *Anthropological Quaterly* Vol.43 pp1-23
- Gangrade, K.D. 1975 "Social Mobility in India: A Study of Depressed Class" *Man in India* Vol.55 pp248-272
- Gupta, T.R. 1961 "Rural Family Status and Migration — Study of a Punjab Village" *Economic Weekly* Vol.13 pp1597-1603
- Hopper, W.D. 1955 "Seasonal Labour Cycles in an Eastern Uttar Pradesh Village" *Eastern Anthropologist* Vol.8 pp141-150
- Lewis, Oscar 1956 "Aspects of Land Tenure and Economics in a North Indian Village" *Economic Development and Cultural Change* Vol.4 pp279-302
- Marriott, McKim 1968 "Caste Ranking and Food Transactions: A Matrix Analysis" in Singer, M. and B.S. Cohn *Structure and Change in Indian Society* pp133-171
- Mukerji, A.B. 1974 "Spacing of Villages in the Upper Ganga-Yamuna Doab" *Man in India* Vol.54 pp21-35
- Nath, V. 1965 "The New Village I-IV" *Economic Weekly* Vol.17 pp679-684, 713-722, 745-750, 777-780
- Opler, Morris E. 1959 "The chronological Change and Social Organization in a Village of North India" *Anthropological Quaterly* Vol.32 pp127-133
- Pradhan, M.C. 1966 *Political System of Jat in Northern India* Oxford University Press, Bombay
- 佐々木明 1980『固定的北インド農村像の近代的起源』信州大学文学部紀要 14号 pp93~104
- Schwartzberg, Joseph E. 1968 "Caste Regions of the North Indian Plain" in Singer, M. and B.S. Cohn *Structure and Change in Indian Society* pp81-113
- Sharma, Hari Prakash 1971 "Caste and Occupational Mobility in a Delhi Village" *Eastern Anthropologist* Vol.23 pp159-179
- Sharma, K.L. 1970 "Changing Class Stratification in Rural Rajasthan" *Man in India* Vol.50 pp257-268
- Sharma, Satya P. 1973 "Marriage, Family, and Kinship among th Jats and the Thakurs of North India: Some Comparison" *Contritions to Indian Sociology* Vol.7 pp81-103
- Singh, Harjinder 1973 "A Study of Leadership Based on Influence in a Sikh Village" *Man*

*in Indid* Val.53 pp19-28

Uttar Prades, State Government of 1965 *Census 1961— District Census Handbook—  
Uttar Pradesh 16— Saharanpur*

Whitcombe, Elizabeth 1971 *Agrarian Conditions in Northern India* Vol.1

Yadava, J.S. 1968 "Factionalism in a Hariyana Village" *American Anthropologist* Vol.70  
pp898-910